

東洋學叢

河村孝照教授退任記念号

最終講義抜粹

わが仏教学

——色心不二について——

河村 孝照 (7)

縁起と縁起説〔上〕

森 章司 (17)

真如親王渡天にみる光と影

里道 徳雄 (40)

良遍の浄土教

田村 晃祐 (56)

カヒールの伝記とその意味

橋本 泰元 (89)

龍樹とアンセルムスの真理論

笠井 貞 (110)

——比較哲学的研究——

Saṃgītiśāstra 所説の観想図像 (rāgadhyaṇa)

清水 乞 (126)

第一格の意味と用法

菅沼 晃 (153)

——Siddhāntakaumudī, Kāraṇaprakaraṇa 訳註 (1)——

婆沙論における断惑説

河村 孝照 (172)

——大毘婆沙論綱要の中——

東洋大学文学部紀要第48集

印度哲学科篇

XX



河村孝照教授 近影

河村孝照博士略歴・業績目録

略歴

大正十三年五月十三日

父河村孝岳、母ヤスの長男として山口県に生れる。幼名斌（あきら）。

昭和七年八月

慈眼院日視師のもとで出家。以後、漢籍の素読をうける。

昭和十七年三月

愛知県立豊橋中学校（現・時習館高校）卒業。

昭和十七年四月

身延山専門学校入学。

昭和十九年九月

同校繰上げ卒業。

同

海軍予備学生として土浦海軍航空隊入隊、終戦により除隊。

昭和二十四年四月

東洋大学旧制文学部仏教学科入学。

昭和二十七年三月

同卒業

昭和二十八年四月

立正大学大学院文学研究科修士課程入学。

昭和三十一年十一月

同修士課程修了、文学修士。

昭和三十二年四月

東洋大学大学院文学研究科博士課程入学。

昭和四十二年三月

同課程修了。

昭和四十二年七月二十五日

文学博士の学位をうける。（学位記伝達式は九月六日）

職 歴

昭和三十三年七月

東洋大学附置東洋学研究所助手。

昭和三十七年四月

同研究所研究員となる。

昭和四十三年四月

同研究所研究員となる。

同

文学部非常勤講師となる。(昭和六十三年三月まで)

昭和六十三年四月

文学部教授となる。

平成四年四月

東洋学研究所長となる。

平成六年三月

同所長任期満了。

平成七年三月

定年により東洋大学を退職。

著 書

一、大正・新脩大藏經索引第十四卷毘曇部上 編集主任 昭和四十三年三月 大藏經学術用語研究会

一、阿毘達磨概説 単著 昭和四十七年七月 大宣堂出版部

一、阿毘達磨論書の資料的研究(学位論文) 昭和四十九年三月 日本学術振興会

一、有部の仏陀論 単著 昭和五十年四月 山喜房

一、法華經読誦音義の研究 編著 昭和五十二年十二月 国書刊行会

一、明治・大正・昭和日蓮門下人名辞典 編集監修 昭和五十三年六月 国書刊行会

一、講座・大乘仏教6 如来藏思想 共著 昭和五十七年五月 春秋社

- 一、日什教学研究序説 編著 昭和五十七年十月 平楽寺書店
- 一、日蓮上人大事典 共編著 昭和五十八年四月 国書刊行会
- 一、法華經概説 単著 昭和六十二年五月 国書刊行会
- 一、中文法華經概説 単著 平成元年一月 新文堂
- 一、新纂大日本統藏經目錄部 著編 平成元年八月 国書刊行会
- 一、新纂大日本統藏經索引部 編著 平成元年八月 国書刊行会
- 一、天台学辞典 単著 平成二年五月 国書刊行会
- 一、敦煌文献目錄スタイン・ペリオ蒐集(漢文文献編) 共編 平成三年四月 東洋大学東洋学研究所
- 一、敦煌文献目錄スタイン・ペリオ蒐集(漢文文献編索引) 上 共編著 平成四年三月 東洋大学東洋学研究所
- 一、新国訳大藏經文殊經典部2 共著 平成五年五月 大蔵出版
- 一、新纂大日本統藏經 全八十八巻 編集主任 昭和五十年―昭和六十三年 国書刊行会
- 一、統藏解題 No. 1
No. 12 単著 昭和五十八年―平成四年三月 自費出版
- 一、国訳一切経毘曇部 二十五、二十六、二十六の下、校訂出版 昭和五十一年九月 大東出版社

学術論文(但し平成元年以降)

- 一、阿毘達磨大毘婆沙論綱要(V1-V6) 平成元年二月 東洋大学大学院紀要第二十五集
- 一、空沙論に説かれた縁起論 平成元年三月 東洋大学東洋学研究所紀要『東洋学研究』第二十三号
- 一、『法華論記』に関する一考察 平成元年三月 立正大学『法華文化研究』第十五号

- 一、『法華論記』に見える仏身論 平成元年十月 天台寺門宗智証大師毫千年御遠忌記念出版『智証大師研究』
- 一、阿毘達磨大毘婆沙論綱要(V9) 平成二年三月 東洋大学東洋学研究所紀要『東洋学研究』第二十四号
- 一、阿毘達磨大毘婆沙論綱要(仏教呼吸法、V26-V28) 平成二年二月 東洋大学大学院紀要第二十六集
- 一、阿毘達磨大毘婆沙論綱要(V9-V12) 平成三年二月 東洋大学大学院紀要第二十七集
- 一、統藏經所収序跋著者人名索引 平成三年六月 東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』第二十六号
- 一、阿毘達磨大毘婆沙論綱要(V13-V14) 平成四年三月 東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』第二十七号
- 一、金剛般若經の經典崇拜と法華經の經典崇拜 平成四年三月 真野龍海博士頌壽記念論文集『般若波羅蜜多思想論集』山喜房

- 一、思益梵天所問經について―方等部經典の一斑― 平成四年三月 立正大学日蓮教学研究會所紀要
- 一、いのちについて―涅槃經を中心に― 平成四年十二月 『印度学仏教学研究』第四十一卷第一号
- 一、曇鸞資料の整理について 平成五年三月 東洋大学文学部紀要『東洋学論叢』第四十六集
- 一、阿毘達磨を通してみた仏教の国土観 平成五年五月 日本仏教学会『日本仏教学会年報』第五十八号
- 一、中国明代における法華受容の諸相 平成五年十月 田賀龍彦編『法華經の受容と展開』平楽寺書店
- 一、阿毘達磨大毘婆沙論綱要(V14-V19) 平成六年二月 東洋大学大学院紀要第三十集
- 一、『涅槃と光明』について 平成六年三月 日本宗教学会『宗教研究』第六十七卷第四号
- 一、宗密『原人論』と唐代の宗教文化 平成六年三月 東洋大学東洋学研究所紀要『東洋学研究』第三十一号
- 一、阿毘達磨大毘婆沙論綱要(V19-V22) 平成七年二月 東洋大学大学院紀要第三十一集
- 一、阿毘達磨大毘婆沙論綱要(V22断惑編) 平成七年三月 東洋大学文学部紀要『東洋学論叢』第四十八集

研究室報告

(1) 本年度の本学役職は、次の如くであった。菅沼 晃教授が平成六年九月十日をもって三年にわたる学長職を無事満了された。森 章司教授が平成六年十一月二十六日をもって三年にわたる理事を任期満了され、評議員に再任された。大学院文学研究科委員長は田村晃祐教授が本年度も担当された。河村孝昭教授は平成六年三月末日をもって東洋学研究所長職を任期満了された。

(2) 平成六年五月八日、本年度も新入生を歓迎して、ゼミ連絡会議の活躍によりバレーボール大会を盛大に催すことができた。学科教員に加えて教務一課職員の方々の参加も得られ楽しい有意義な一日を過ごすことができた。

(3) 平成七年一月十九日、河村孝昭教授が本年度末をもって定年により本学を去られるに際し、先生の最終講義を開催した。仏教学科時代の出身者で仏教界や学会で活躍しておられる校友の方々、本学他学部他学科の先生方および大学院生と学部生多数の聴講者を得て、五限目の授業時間を利用した最終講義は盛会であった。引き続き会場を浦水会館に移し、河村先生を囲んで懇親会を設けた。

(4) 白山新研究棟が平成六年十二月に完成したのに伴い、大学院生・学部生の協力を得て現研究室の引越を平成七年二

月二十日に完了した。

(5) 演習ゼミが本年度で四年を経たが、卒論提出者がⅠ部で六十四名、Ⅱ部で四十四名であった。

(6) 本年度の朝霞校舎でのティーチング・アシスタントは大学院後期課程の塩澤靖浩君が担当した。

(7) 本年度の優秀論文に対する褒賞は次の如くであった。田村芳朗奨学金受賞者—赤羽徳彦、石井あさき(Ⅰ部) 伴恵理子(Ⅱ部)。勸学奨学金受賞者—河原聡美(Ⅰ部) 明石雪絵(Ⅱ部)。校友会学生研究奨励基金受賞者—佐竹紀子(Ⅰ部)、増田智士(Ⅱ部)、中根洋雅(大学院)。

平成六年度業績

菅沼 晃

▲著書▼

『サンسكريットの基礎上』平河出版 平成六年八月

▲論文▼

『仏陀が説いたことは』『大法論』平成七年二月号

『向下門の哲学—百姓の学者、井上円了の思想』『宝積』第六号 平成七月一月

『第一格の意味と用法—*Siddhantaśāstramudī, Karakaparakar. vna* の訳註(1)』『東洋大学文学部紀要』第四八集 平成七年三月

△講演等△省略

田村晃祐

△論文△

“The Legacy of Medieval Buddhism”, *Quarterly of the Niwano Peace Foundation*, No. 46, Oct. 1994.

「伝教大師の思想と日本仏教」『大法論』平成七年二月号、三月号

「最澄研究の諸問題」『仏教学』三五号 一九九五年三月

「良遍の浄土教」『東洋大学文学部紀要』第四八集 平成七年

三月

△研究発表△

「最澄研究の動向」仏教思想学会 平成六年六月四日

「最澄の思想と鎌倉仏教」北海道印度哲学仏教学会 平成六年六月二十五日

森 章司

△著書△

「原始仏教から阿毘達磨への仏教教理研究」東京堂出版 平成

七年三月

△論文△

「仏教の聖典観」『東京ボナベントウラ研究所紀要』一九九四年号

「縁起と縁起説(上)」『東洋大学文学部紀要』第四八集 平成

七年三月

△研究発表△

「近世の真宗宗学概観」大倉精神文化研究所研究例会 平成六年五月一日 於大倉精神文化研究所

「如実知見と解脱知見」比較思想学会第二回大会シンポジウム「現代における智の射程」平成六年六月一日 於早稲田大学

「縁起と縁起説」東洋学研究例会 平成六年一〇月一日 於東洋大学

「仏教の無我」日本性格心理学会公開シンポジウム「東洋の

無我と西洋の自我」平成六年十一月二日 於東洋大学

里道徳雄

△著書△

「生死一如」東京本願寺出版部 平成六年十月

「臨済録―禅の神髄―」日本放送出版協会 平成七年三月

△論文△

「真如親王滅天に見る光と影」『東洋大学文学部紀要』第四八集 平成七年三月

△その他△

「楽土の問題」東京本願寺夏期講座 平成六年七月

「禅の茶掛」みさき苑文化サロン 平成六年十月

「内なる自然」東京真宗大学講座 平成六年十一月

「夢中間答集を読む」八王子市婦人センター 平成七年二月

笠井 貞

△論文△

「Nāgārjuna and Spinoza on Truth—A Study in Comparative Philosophy—」『印度学仏教学研究』第四三巻第一号 平成七年三月

「道元禪師と聖アウグスティヌスの「心」について」『宗学研究』第三十七号 駒沢大学宗学研究所 平成七年三月

「龍樹とアンセルムスの真理論—比較哲学研究—」『東洋大学文学部紀要』第四八集 平成七年三月

清水 文

△著書△

The Bhāgavata-purāṇa Miniature Paintings from the Bhandarkar Oriental Research Institute Manuscript Dated 1648 (Translated by R. W. Giebel), The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, The Toyo Bunko, 1993.

△論文△

「Kṣemakaraṇa: Rāgamālā の写本」『東洋大学文学部紀要』第四七集 平成六年三月

「初期ラーガ・ディヤーナについて」『アジアにおける宗教と文化』東洋大学東洋学研究所 平成六年三月

橋本泰元

△論文△

「カビールの原典に見るカースト批判」『叢書カースト制度と被差別民 第一巻 歴史・思想・構造』明石書店 一九九四年一〇月

「カビールの伝記とその意味」『東洋大学文学部紀要』第四八集 平成七年三月

△研究発表△

「中世北インドにおける民衆思想—カビールの場合」東洋学研究所研究例会 平成六年五月七日 於東洋大学

△その他△

「南アジア 中世（一九九三年の歴史学会—回顧と展望—）」『史學雑誌』第一〇三編第五号 平成六年五月

「クロニック世界全史」講談社 一九九四年二月（分担執筆）

平成六年度ゼミ活動報告

清水 文

インド哲学演習Ⅰ 朝霞

(1) テーマ「宗教儀礼と芸術」

(1) メンバー 鈴木大輔(幹事) 他二年生一四名、三年生一名、四年生一名。

(3) テキスト 前期「ジュリープラシユナ・サンヒター」三十四章、後期「サンギートーパニシャット・サーローダーラ」三章

(4) 活動報告

サンスクリット語テキストの輪読を中心とした。前期テキストの内容(歌舞供養)を受けて、後期のテキストに移ったが、両テキスト共に、記述は格一的で、数例を読めば、後は、各自が自習することができる内容である故、文法、訳語、特に術語の習得に重点を置いた。毎時間、自主的に発表した、発表者が限定されて、全体として低調であった。発表者はT A塩沢君の指導をえて、実に熱心であった。

インド哲学演習Ⅰ 白山Ⅰ・Ⅱ部

(1) テーマ「インド美学と芸術」

(2) 思想メンバーⅠ部 野中桃子(幹事)他三年生九名(内一名長欠、四年生四名(内二名長欠)。Ⅱ部 加藤千晶(幹事)他三年生五名、二年生八名(内一名長欠)、四年生七名(内一名長欠)。

(3) 活動報告

本ゼミの目的は、一つには、最近わが国に多く紹介され

るようになったインドの諸芸術(絵画、彫刻、音楽、舞踏)

に対する鑑賞理論をバラタのラサ論(美的体験論)に求め、インド芸術に関する普遍的理論を理解すること、いま一つは理論を離れて、自主的に好みの芸術を味わうことにある。

基本的には昨年度と同じであるが、本年度はサンスクリット語のテキストを読む希望が強かったので、バラタ「ナートイヤ・シャーストラ」六章(ラサの章)をテキストにした。上村勝彦訳とテキストを全員に配布し、日本語訳によって、全体を読んだ上で、一冊毎に、サンスクリット語テキストを分担発表することにした。

前期は清水がテキストに従って、ラサ論を概説し、後期にテキストの輪読をした。四年生対象の卒論発表はⅠ部は該当者一名、Ⅱ部は七名(内二名は演習単位認定済)であったので、テキストの輪読と平行して行った。卒論発表は、進行状態が一定せず、制作過程に応じて発表した、が、反って、これはよかった。

次第に恒例化して来たⅠ部・Ⅱ部合同の研究会を七月一九・二〇日の両日、図書館で行ったが、本年度は七名の参加に終った。再考の時期に来ているように思う。

菅沼 晃

インド哲学演習Ⅱ 白山Ⅰ部

(1) テーマ「インド思想の人間観」

(2) メンバー 大成果(幹事)、石井あさき(記録係)、四年生一四名、三年生一〇名、特別参加大学院生二名

(3) 活動報告

このゼミの目的は二つあり、一つはサンスクリット文法をインドの伝統に従って学ぶことであり、二つ目はインドの原典を使って、インド思想の中で人間がどのように捉えられているかを明らかにすることである。

第一の点については、サンスクリットで書かれているサンスクリット入門書 *Sanskṛta-pravāṇikā* を講読し、ヨーロッパ的文法観念によらないインド独自のサンスクリットを学習した。本年度でこのテキストを読了したので、翻訳を残す予定である。

第二のテーマについては、インドの人間観を総合的に捉えることを目的とし、それぞれが興味をもつテーマに従って全体を四つのグループに分け、それぞれのグループに大学院生にチューターとして入ってもらい、各グループが文法発表二回、思想研究の発表三回を行った。

A班 ウパニシャッド班、六名、院生三名。「マイトリ・ウパニシャッドにおける我について」「マイトリ・ウパニシャッドにおける三つの我の関係」など。

B班 叙事詩班、九名、院生二名。「インド人の人生観―人生の目的」「なぜ『Upanishad』の各々が必要なのか」

C班 仏教班、四名、院生一名。「原始仏教における無

我・肯定される自己と否定される自己」など。

D班 仏教班、五名、院生四名。「仏教で否定される我―種子部のブトガラ説」など。

ゼミ合宿 平成六年九月二―四日、稲取ゼミナーハウス。ゼミ生、大学院生、インド思想研究会合同合宿。ゼミ卒業生も参加し合計約五十名が参加。サンスクリット学習、卒論、修士論文、博士後期課程在学者は年間テーマの中間発表。

森 章司

インド哲学演習3 白山1部

(1) テーマ「戒律研究」

(2) メンバー 松本美穂(幹事、四年)他八名。

(3) 活動報告

今年度の年間研究テーマは昨年度に引き続き、「戒波羅蜜の研究―仏教における修行道としての戒の位置付け」であった。大正新脩大蔵經の印度撰述部のすべてを対象として、その索引によって戒・戒波羅蜜・六波羅蜜・戒学・三学・五分法身などの用例をすべて拾い出し、また各経論の組織の中で戒波羅蜜などがどのような位置付けをされているかを調査し、資料集を作ることを目指した。

年度初めは新入ゼミ員のために、森が戒律について概説し、右記の作業に入った。

今年度は、昨年度から繰り越された「般若部」「華嚴部」

「涅槃部」「大集部」「經集部」「釈經論部」「中觀部」「論集部」の作業を行った。まず索引により、該当語句が含まれる箇所をコピーして、これをもつ文献（經論）の内容概略と、その訓読、用例の特徴を摘記し、検討をした。学生諸君に漢文の仏典を読みこなす力が備わっていないこと、どの用例もありきたりで、期待したほどのヴァリエーションがなかったせいもあって、この作業は難行苦行となったようであり、したがって残念ながら十分な成果を上げることができなかった。資料集を作ることが目標となっていたので、学生諸君が集めてくれた資料をもとに、森がこれをまとめるといふ宿題を課せられた。

また後期は、夏休みの課題であった「自由研究」の発表と、卒業論文の中間発表に相当の時間数を使った。

来年度のテーマは「インド法と仏教法の比較研究」であって、例えば殺人罪や盗罪などについて、「マヌ法典」や「ヤージュニャヴァルキヤ法典」などインド法典の規定と、パリー律など仏教の律蔵の規定を比較対照し、ヒンドゥー教と仏教の法理念や罪觀念・贖罪の仕方、あるいは社会制度に対する考え方などを研究する。

インド哲学演習 4 白山Ⅱ部

(1) テーマ「戒律研究」

メンバー 伊藤悠二（幹事、四年）、福家昌浩（副幹事、

三年）他一七名。

(3) 活動報告

今年度の年間研究テーマは「*pāṇinīyaka*の研究」であった。「經分別」の第二波羅夷を取り上げ、この条文が作られる因縁や判例などを含めて、さまざまな視点から自由に検討した。

年度初めは新入ゼミ員のために、森が戒律について概説し、右記研究に入った。

律蔵の成立過程や原始仏教教団の様態をはじめとして、律蔵の背景にある古代の印度社会や、律蔵の法理念などにも関心の範囲が広まり、また律蔵やマヌの法典まで調査するなど研究方法も本格的となつて、レベルの高い発表が多かった。その具体的な成果は、「森ゼミ紀要」第四号に収録されるはずである。

また後期は、夏休みの課題であった「自由研究」の発表と、卒業論文の中間発表に相当の時間数を使った。ここでも意欲的な研究が披露され、ゼミの質が高まりつつあることが確認された。

来年度のテーマは「大乘戒經の研究」であつて、「菩薩内戒經」「瑜伽論」「優婆塞戒經」「梵網經」などをテキストにして、大乘仏教の教団運営論、出家者と在家者の生活倫理、受戒儀式、社会観、罪と贖罪観、大乘律との比較などをグループごとに研究する。

里道徳雄

仏教学演習Ⅰ 白山Ⅰ・Ⅱ部

(1) テーマ a. 「大宋僧史略」の研究

b. 中国仏教、禅思想研究

(2) メンバー Ⅰ部 勝野秀敏(幹事) 他三年生一〇名、四年生七名。Ⅱ部 佐藤真城(幹事) 他二年生七名、三年生三名、四年生六名。

(3) 活動報告

年度初から(a)「大宋僧史略」を一人二項平均ずつ担当し研究報告を重ねて来たが、後期から(b)は、学生の研究課題に添って研究発表することになって、それを行った。規則としては、毎週担当者が研究発表を行い、毎月末第四授業日には、その月の「研究報告レジメ」を必ず提出する等々を原則的に決めてある。

田村晃祐

仏教学演習Ⅱ 白山Ⅰ・Ⅱ部

(1) テーマ 「鎌倉仏教の研究」

(2) メンバー Ⅰ部 大脇康之(幹事) 他二五名、Ⅱ部 宮崎 剛(幹事) 他一六名

(3) 活動報告

最初に昨年度までの反省及び今年度ゼミへの希望を各人に記して頂き、二回目にそれをまとめて全員に渡して討

議、本年度の方針について協議した。その結果、前期は「観心覚夢抄」の読解を行い、後期については始めに相談することとした。後期始めの相談でも引続いて「観心覚夢抄」を読み続けることとした。

本年度は、「四分安立」の項から読み始めたが、十月に入ってやっと読み終るくらいであった。

そこで、「観心覚夢抄」は本年度で終了としたいため「三類境義」以下、主要な語句を抽出して各人に割当て、その内容の解説を毎時間一名宛行って頂きながら、他方、重要な箇所を指定して読解する方法をとった。唯識という考え方自体が常識を離れている点があるため、なかなかその本義を理解し難い点があり、同じことを何回も説明せざるを得なかったこともあり、遅々として進まなかったが、その思想の概要は把握してもらえたように思う。

卒業論文について、その考え書き方の要点をプリントして配布し、年度始めに論題及び研究基本方針の提出を求めて論評し、十月、十一月と中間発表をさせ、質疑・論評・指導を行った。

例年のように春秋に東京近郊へのゼミ旅行、九月に奈良への二泊三日の研究旅行を行った。春・秋の旅行は日蓮関係を中心とし、春は鎌倉で日蓮辻説法の跡・本覚寺・妙本寺・安国院寺・龍口寺・光則寺、秋には中山の法華経寺を訪れて、日蓮の苦難の一生を偲び、また藤沢の遊行寺の一

河村孝照

仏教学演習Ⅰ 朝霞

ッ火の儀式に参詣して、莊嚴に神妙な念仏の雰圍氣を味わい、賦算のお礼を頂いた。
奈良は、『観心覺夢抄』の著者良遍の關係寺院を主とし、興福寺・春日大社・般若寺・東大寺知足院・白毫寺・新薬師寺・竹林寺などを訪れ、良遍の思索と坐禪の跡を偲び、また奈良仏教の昔を考え、現在に感慨一入なるものがあつた。

- (1) テーマ「天台四教儀の研究」

- (2) メンバー 笠井文雄（幹事）他一九名

- (3) 活動報告

関口真大編「天台四教儀」（山喜房）をテキストに用い、次のような発表形式をとった。授業の始めに、その日の該当部分を、TAがリーダーとなってテキストの素読をし、漢文口調に慣れさせる。次に担当者二名が発表する。発表者は、予め割当てられたテキストを、(一)読み、(二)調べた語釈を発表し、(三)調べた際に不明なところを指摘して、発表が終わる。学生間の質疑応答の後、教師が講評し、再度仏教全体との関わりを指摘しながら、テキストを説明して終わる。

割当てられた学生は、語句の解釈を熱心に行なってきた。

た。しかも重要な点は、一つの語にいくつかの解釈があり、また仏教辭典によってそれぞれの解釈のあるところをすべて列挙し、その中でどの解釈をとるか、という作業をもって進めたことは、仏典学習上きわめて適切な方法であつた。TAの指導も適切であつた。

仏教学演習Ⅲ 白山Ⅰ部

- (1) テーマ「阿毘達磨思想研究」

- (2) メンバー 田中 敏（幹事）他四名

- (3) 活動報告

冠導俱舍論「智品」をテキストとした。智慧を直接対象とした研究は、しばらく学界の表には出ていなかったが、川崎信定博士の「一切智思想の研究」が世に出て、しかも受賞の対象となったことから、智品をとりあげて研究対象とした。ゼミの進め方は、河村が俱舍論を板書し、冠導本による注解をベースにして注釈をつけ、学生は個々に真諦訳との対照、梵本との対照、西蔵本との対照を実施して、教師と学生との質疑応答をもって進めた。学生との共同作業方式を一年間進めると卒論において、梵本、西蔵本を自分で翻訳しながら論文作製にあたった学生も出てきており（Ⅱ部も同様）、学習の成果はひとまず所期の目的を達したと言えよう。

仏教学演習Ⅲ 白山Ⅱ部

- (1) テーマ「阿毘達磨思想研究」

- (2) メンバー 関 貴宏(幹事) 他三名
(3) 活動報告

阿毘達磨俱舍論「根本第二」をテキストにした。本年度は阿毘達磨思想中、因果論、なかでも六因五果四縁論をとりあげた。発表を割当てられた学生は冠導俱舍論によって発表し、その後、学生から質問するという形式である。冠導本の註釈はほとんど「国訳一切経」(大東出版社)毘婆沙第二五巻の俱舍論の脚注におさめられており、かつ本頌のサンスクリットも収められているので国訳をも参考としながら進めていった。

学生が意欲的に取組んだので、学習態度の上で満足のいくゼミであった。

笠井 貞

仏教学演習Ⅰ 白山部

- (1) テーマ「正法眼蔵講読」
(2) メンバー 立花純孝(幹事) 他二五名
(3) 活動報告

道元の主著「正法眼蔵」を読むことによって、道元の思想内容を理解することを目的とする。それに基づいて、道元の印度・中国・日本仏教思想史上における位置づけをし、また道元と同時代の新旧日本仏教思想との比較をし、それぞれの特色を把握する。更に思想系譜・思想形態

を異にする西洋の哲学・宗教思想との対比をする。以上のことを考慮しつつ、本年度は、「現成公案」・「光明」・「生死」の巻などを、学生中心に輪番で研究発表をして、質問・討論をした。

仏教学演習Ⅱ 白山Ⅱ部

- (1) テーマ「正法眼蔵講読」
(2) メンバー 宮下浩二(幹事) 他一七名
(3) 活動報告

道元の主著「正法眼蔵」を読んで、その思想内容を理解することを目的とする。それに基づいて、道元の仏教思想史上における位置づけをして、道元仏法の特色を把握する。更に系統と形態が異なる西洋の哲学・宗教思想との対比を試みて、それらの特徴を探索する。以上を目標に、本年度は、「非道話」・「現成公案」・「生死」その他の巻を中心に、学生自身が研究して輪番制で発表をして進めて行った。

橋本泰元

インド哲学演習Ⅰ 白山Ⅰ部

- (1) テーマ「ヒンドゥー教思想研究」
(2) メンバー 関野 勉(幹事、三年) 他三年生九名、四年生八名
(3) 活動報告

主として広義の北インドにおいて一五〜一六世紀に民衆思想として結実するバクティ（信愛・帰依）の宗教思想の源流を、一〇世紀ころ成立の「パーガヴァタ・プラーナ」に求めることを目的とした。具体的には本プラーナの「ラーサの五章」を昨年度に引続き、受講生に分担してもらい文法的に詳細な読解作業を進めた。この作業の過程で重要な術語とその思想的背景を担当教員が説明を簡単に加え参考文献の紹介等を行っていた。前期終了時期より卒業論文の中間発表をほぼ各週ごとに行行して行った。論文のテーマが様々な分野にわたりこれまでの紹介も少ないせいか、質疑応答はあまり活発でなかった。ただし、論文のテーマは、開拓的な意欲に満ちたものだったと思う。

インド哲学演習3 白山Ⅱ部

- (1) テーマ「ヒンドゥー教思想研究」
- (2) メンバー 伊藤周太（幹事、三年）他二年生八名、三年生五名、卒論執筆者一名。
- (3) 活動報告

Ⅱ部に同じ。前期初めころには担当教員が、プリントを配布して新人ゼミ生を対象に、簡単にヒンドゥー教思想史を解説した。その後「パーガヴァタ・プラーナ」の読解作業に入った。しかし、語学力不足によりあまり進まなかった。原典読解作業と同時に、主に和文研究書コピーを配布し、分担者にレジュメ作成・発表を行ってもらいゼミデー

マの内容理解と卒論準備の促進を図った。

金子芳夫

インド哲学演習2 白山Ⅱ部

- (1) テーマ「仏教における心の問題」
- (2) メンバー 伴 恵理子、明石雪絵（幹事）他二名
- (3) 活動報告

ゼミの年間授業内容は、初期大乘仏教の中観思想を学ぶために、竜樹造「廻靜論（Vigrahavivartanī）」をテキストに原典講読を行った。本論書には、梵語のほか漢訳・西蔵訳も現存するので、併せて諸訳の比較という視点で演習をすすめた。その他、卒業論文の中間報告並びに個人面接を実施した。

概略を示すと、竜樹の伝記と著作、竜樹以降の中観派の流れなどの講義に引き続き、メンバーの担当者によるテキスト演習に入った。特に後期に入ってから、本ゼミの構成メンバーの大半が卒業論文作成に取り掛かっていたこともあって、論文の書き方などの指導に当たったこともしばしばあった。

尚、授業の一環として夏期休暇中（九月二〜四日の二泊三日）に、和歌山県の熊野古道約四〇キロメートルを踏破、古来日本人に親しまれた熊野参詣の体験学習を実施した。

平成六年度開講科目

△Ⅰ部▽

サンスクリット文献講読	必修	朝霞	渡辺	郁子
サンスクリット文献講読	必修	朝霞	渡辺	郁子
仏教学概論	必修	朝霞	森	章司
インド宗教史	必修	朝霞	橋本	泰元
中国教史	必修	朝霞	里道	徳雄
日本仏教史	必修	朝霞	田村	晃祐
宗教学概論	必修	白山	笠井	貞
インド哲学特講Ⅰ	必修	白山	橋本	泰元
インド哲学特講Ⅱ	必修	白山	山本	義文
インド哲学特講Ⅲ	必修	白山	五十嵐	明宝
卒業論文	必修	白山		
インド哲学演習Ⅰ	選必	朝霞	渡辺	章悟
インド哲学演習Ⅰ	選必	朝霞	清水	乞
インド哲学演習Ⅰ(再履)	選必	白山	中山	清田
仏教学演習Ⅰ	選必	朝霞	河村	孝照
仏教学演習Ⅰ	選必	朝霞	島田	茂樹
インド哲学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	清水	乞
インド哲学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	菅沼	晃
インド哲学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	森	章司

△Ⅱ部▽

インド哲学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	橋本	泰元
インド哲学演習Ⅱ(再履)	選必	白山	中山	清田
仏教学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	里道	徳雄
仏教学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	田村	晃祐
仏教学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	河村	孝照
仏教学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	笠井	貞
パリー文献講読	選必	白山	(休講)	
仏教漢文講読	選必	白山	進藤	英幸
法華經字概説	選必	白山	(休講)	
禅学概説	選必	白山	里道	徳雄
チベット文献講読	選必	白山	金子	英一
浄土学概説	選必	白山	(休講)	
密教学概説	選必	白山	金岡	秀友
インド美術	選必	白山	(休講)	
宗教学	選必	朝霞	笠井	貞
宗教学	選必	朝霞	渡辺	章悟
仏教学概論	選必	白山	森	章司
サンスクリット文献講読	選必	白山	渡辺	郁子
インド宗教史	選必	白山	橋本	泰元
中国仏教史	選必	白山	里道	徳雄
日本仏教史	選必	白山	田村	晃祐
卒業論文	選必	白山		

△大学院▽

インド哲学特講Ⅰ	必修	白山	真梨 弘宗	印度哲学特論（インド浄土思想の研究）	藤田 宏達
インド哲学特講Ⅱ	必修	白山	金子 芳夫	印度哲学演習Ⅰ・印度哲学特殊研究Ⅰ	
インド哲学特講Ⅲ	必修	白山	由木 義文	（仏本行集経研究）	金岡 秀友
インド哲学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	清水 乞	印度哲学演習Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ	
インド哲学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	金子 芳夫	（サンスクリット統語論の研究—Siddhāntakauṃḍī, Kāṭakapīṭṭhānaを中心としたKāṭaka理論）	菅沼 晃
インド哲学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	橋本 泰元	仏教学特論Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ	
インド哲学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	森 章司	（十不二門指要鈔）研究）	河村 孝照
インド哲学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（再履）	選必	白山	真梨 弘宗	仏教学特論Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅱ	
仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	里道 徳雄	（Dhyānaの研究—Sādhanaṃālaを中心として）	清水 乞
仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	田村 晃祐	仏教学特論Ⅲ	
仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	河村 孝照	（禪宗語録の研究Ⅰ（I） 黄檗断際禪師伝心法要）	
仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	笠井 貞		
仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（再履）	選必	白山	真梨 弘宗		
禅学概説	選択	白山	（休講）		
仏教漢文講説	選択	白山	（休講）		
チベット文献講説	選択	白山	（休講）		
密教学概説	選択	白山	（休講）		
法華経学概説	選択	白山	島田 茂樹	仏教学演習Ⅰ（正法眼蔵講説）	里道 徳雄
浄土学概説	選択	白山	河村 孝照	仏教学演習Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ	田村 晃祐
インド美術	選択	白山	五十嵐明宝	（「法華玄義」の研究）	森 章司
パトリ文献講説	選択	白山	清水 乞	仏教学演習Ⅳ（四分律行事鈔）の研究）	
宗教学	選択	白山	石上 和敬	印度哲学特殊研究Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ	菅沼 晃
	選択	白山	渡辺 章悟	（インド学の諸問題）	
	人文	白山		仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅰ	田村 晃祐
				（天台教学の研究）	

平成六年度卒業論文

Ⅰ部

- 君島 光紀 律蔵における因縁譚の研究
後上 真人 中観派とニヒリズム
大豆生田幸雄 鈴木正三の研究
野村 祐一 映像メディアとしての映画と教化、布教活動
駒木根 敬 鎌倉新仏教成立の構成要素
上田 耕司 鈴木正三の思想についての考察
中村 成利 不動明王信仰における山岳信仰の現代性の研究
高木 孝 ニヒリズムと仏教
玉川明日香 道元とハイデガーの生死観と時間についての考察
人間は神にならない
疋田 宜子 律蔵における比丘尼とその非梵行を中心としての考察
河原 聡美 ZEN派に見る禁忌侵犯について
立花 純孝 道元の生涯と理想とした正法―特に著作中にみられる仏法の理想像についての一考察―
大脇 康之 天台大師智顗の教相判釈論―智顗の涅槃経観―
松本 美穂 南瞻部洲とそこに流れる時間
赤羽 徳彦 破我品に於ける勝論の有我説について
村上 純子 ミーラー・パーイーにおけるクリシュナ讃歌と

現実の関係

- 久利 素生 草創期金剛三昧院の研究―開山行勇を中心として―
木村 昌悟 黄蘗の施餓鬼
濱野 歩 「大乘阿毘達磨雜集論」に於ける心所考察
清野 亮一 正法眼蔵における身心脱落
小林 健 一廻上人と踊り念仏―時代背景の中の踊り念仏―
橋下町瑞希 カータカ・ウパニシャッドにおける他界観
李 佳 井上円了における仏教の哲学再構築とその限界
稲 直子 「ダンマパダ」における自己確立
椎名 真義 「バガヴァッド・ギーター」における samyasa
石川 啓治 良道の三性三無性―「観心覚夢抄」を中心にして―
小林 武 サークヤ・カーリカーにおけるトリグナの研究
安藤 祐 新羅元曉の伝記と思想―その成立について―
大橋絵理子 「正法眼蔵」における自然観と仏性について
山崎 真智 道教とナート派の不死性の獲得における類似性について
大成 友果 言葉と認識―ミーマーンサー学派における言語の捉え方―
坂本 健一 部族信仰の霊的存在の役割

古川 真弓 鈴木正三と仁王禪

平林 幹雄 風狂の思想——休の場合——

宮本 繭美 インド神話と信じることに於ける考察

根本 泰論 水墨画と禪——とくに「村周継について」——

有賀 雄吉 現代における坐禪

鈴木 雅樹 仏教における女性差別と道元の女性観

大阪 大 仏教須弥山世界の研究

前山 英之 蘇我氏と仏教

中村 和巳 『成唯識論』の認識構造

南條 努 Rāmāyana に於ける人間観と Ayodhyā-kāṇḍa

千葉 有理

南 雅一 『日本書紀』の中の女性

『Bhaktirasamṛtasindhu』における五つの主

要な rasa

新井 尚恵 ヴァジュラパーニの起源とヤクシャから菩薩

へ

木浪 秀剛 クリシュナムルティの著作「Education and

the significans of life」における教育論

村田香奈恵 「バガヴァッド・ギーター」におけるカルマ・ヨ

ーガ

真喜志 敦 聞名思想の研究

南雲 正行 道元の生死観

山鳥あおい 「バガヴァッド・ギーター」における理想的な行

為

望月 健司 宗教と哲学者

鎌谷 崇司 道元の「只管打坐」とその意義について

田中 敏 俱舍論に於ける三世実存論争——時間と存在を見

つめる目差し——

門馬 慶直 現象学と禪

森川 芳生 弘法大師空海の「御遺告二十五カ条」について

吉田 未来 如来蔵思想の研究——勝鬘經における如来蔵思想

について

佐竹 紀子 源信における念仏思想と頑善の者の行う念仏

丸山 直光 知識の仏門

山本 敏治 仏伝に於ける Devadatta

似田貝 旭 現代社会におけるインド思想

石井あさぎ 『俱舍論』における無我の問題——犢子部のブドガ

ラ説をめぐる論争——

奥野 恭子 ヴァッラバ派のピチュワイーに關すること

瀬戸 淳一 阿毘達磨俱舍論における六因四緣論の研究

荒川 紀子 マハーバーラタ「ナラ王物語」におけるダマヤ

ンテーー妃の描写

△Ⅱ部▽

小林 裕直 「不動智神抄録」における主體的立場について

中山 玄一 「禪画」の表象と意味するもの

永井 繁 道元禪師の縁起と実践についての一考察

- 高橋 瑞 「胎蔵界曼荼羅尊位現圖抄私卷第一」の研究
 田中 将史 アジャントー石窟寺院に関するレポート
 熊谷 一八 華嚴経・如来性起品について
 富永 晃一 密教と現代社会
 増田 智士 「俱舍論」における十二支縁起説について
 木村 拓 *Bhāt-saṃhitā* における *Vastu-purusa-māṇḍala*
 菅沼 忠行 漢訳仏典におけるダキニの諸相
 阿部加奈子 自他一体の思想について―「慈雲短篇法語」「秘密安心义略」をもとに―
 柳瀬 秀子 *Yogasūtra* ヨーガ根本教(聖)典の研究
 土田 照誠 理趣経について―大衆思想を中心として―
 鈴木 有里 弥勒・弥勒を信仰した人物達
 逢坂 弘伸 釋雲照の夢
 伊藤 修二 南伝大蔵経における牛の諸相
 安藤健一郎 カーマストロにおける古代インドの芸術観―64芸について―
 谷道 朝美 尼總持の研究
 赤坂 広子 女人往生問書の研究
 伴 恵理子 閻魔の変遷
 関 貴宏 阿毘達磨俱舍論に説かれる本願の比較研究(界品・根品)
 杉山 力也 禅を理代に考える―この先の自分に生かすため

- 原島 昭 空海の真言密教について―「十住心論」における真言観―
 大倉 伸弘 中国仏教における肉食の形成過程
 大龍 顕一 ここをみる―唯識的なものの考え方―
 河崎 陽滋 俱舍論に於ける九十八隨眠の研究
 立道 修 大乘戒増独立の原因
 皆川 武揚 蓮如「本願寺教団の成立と台頭への道程」
 本多 忠利 仏教の男女隔差―仏弟子の生活からの考察―
 堀添 雄二 十牛圖―迷・悟の分岐点―
 明石 雪絵 ヨーガ・シヤタカにおけるインド伝統医学について―アーユル・ヴェーダを通じて―
 田島 丈太 日本仏教における女性差別
 迎 直樹 不殺生成の研究
 細田 正人 サンスクリット詩論に於ける *rasa* の領分―*Rasikāraṇa* 説を中心として―
 平林 明美 リグ・ヴェーダの神々
 宮崎 恵 戒体思想について
 宮崎 剛 唯識の日本化―良廻の思想―
 藤石 寛 「歎異抄」について
 宮下 浩二 「正法眼蔵」に於ける存在の研究
 吉成 孝元 仏教における生死について
 高井 亮 内山愚童とその思想の到達点

高杉 純子 日本人の日常生活と仏教

砂川 直哉 初期 Zen 論について

鈴木 洋州 古代スリランカにおける Ceylon 建築と信仰

大学院修士論文

嵩山 佳代 中国初期禪思想の研究

中根 洋雅 バルトリハリの言語哲学研究—Vākyapadīya

第一章：Brahmakāṇḍa を中心として—

梁 錦屏 原始仏教における「自淨其意」

東洋學論叢

(東洋大學文學部紀要第48集)

印度哲學科篇

平成七年三月三十日

印刷

平成七年三月三十日

発行「非売品」

発行所 東洋大學文學部

東京都文京区白山五丁目二八番二〇号

電話 印度哲學科 (三九五) 七五七

印刷 日新印刷株式會社

東京都文京区大塚五十二番五十七

電話 〇三―三九四三―一四一一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters
Toyo University

NO. 48

March, 1995

Series of
INDIAN PHILOSOPHY

XX

CONTENTS

Kōshō KAWAMURA: An Extract from the Last Lecture — on the <i>Advaita</i> of <i>Rūpa</i> and <i>Citta</i>	(7)
Shōji MORI: <i>Pañiccasamuppāda</i> as <i>Dhamma</i> and as <i>Sāsana</i>	(17)
Norio SATOMICHI: Lights and Shadows Thrown on the Voyage of Prince Shinyo to India	(40)
Kōyū TAMURA: The Characteristics of Hossō Priest Ryōhen's Understandings on Pure Land Doctrine	(56)
Taigen HASHIMOTO: Biographies of Kabir and Their Socio- religious Meanings	(89)
Tadashi KASAI: Nāgārjuna and Anselm on Truth — A Study in Comparative Philosophy	(110)
Tadashi SHIMIZU: <i>Rāgaḍhyānas</i> Described in the <i>Saṅgīta- darpaṇa</i>	(126)
Akira SUGANUMA: A Japanese Translation and Notes of the <i>Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa</i> (I) — The Meanings and Usages of the First Case (<i>prathama- vibhakti</i>) according to P. II. 3. 46, 47	(153)
Kōshō KAWAMURA: A Summary of <i>Abhidharma-mahāvibhāṣā- śāstra</i> V 22	(172)

Published by
TOYO UNIVERSITY
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo